

ビルマ語とロロ諸語

——その声調体系の比較研究——

西 田 龍 雄

1

ビルマ語の歴史は、残存する文献資料にもとづく限り、1112年に作られた Myazedi 碑文の形式より以前に遡ることができない。現在話されているビルマ語諸方言の中には、Tavoy 方言、Arakan 方言などのごとく、たしかに古い形式をよく保存している方言があるが、それらの方言をも含めて、一般に、現代諸方言形式は、Myazedi 碑文にもとづいて構成できる形式¹⁾——私のいう中古ビルマ語形式——によって代表され得るということができる²⁾。しかし、12世紀初頭以前のビルマ語の形式も——かりに、それを古代ビルマ語形式とよぶ——ビルマ語と顕著な親属関係をもっている数種の言語を比較考察することによって、全般的に推定し得るのである。そのような言語としては、まず中国雲南省からビルマのカチン州に分布する Maru 語、Lashi 語、Atsi 語があり、ついで Lolo 系の諸言語、Nyi 方言、Ahi 方言、Hani 語、Lisu 語、Lahu 語、Nasu 語などをあげることができる。ロロ族をはじめとするそれらの諸族は、いずれもビルマ族と共に、おそらく中国西南の地域から移動し、南下の過程において分散した部族であったと考えられ、現在それらの諸族が話す言葉は、ビルマ語と音素体系・文法体系に規則的な対応関係をもっている。それ故、これらの諸言語の比較研究を通じて、ロロ・ビルマ諸語のたどってきた歴史をあとづけ、文字に表記される以前の古代ビルマ語形式を推定することが可能になってきた。

私は、手許にある資料から、この仕事を進めているが、本稿では、その中、二三の問題について論じてみたい。

2

まず、ビルマ語とロロ諸語をとりあげ、その間の関係の一部について単純に考えると、つき

- 1) 中古ビルマ語については、拙稿「Myazedi 碑文における中古ビルマ語の研究」I, II『古代学』4巻1号 1955., 5巻1号 1956. を見られたい。
- 2) 勿論 Myazedi 碑文は中古ビルマ語の資料としては限られたものであるから、たとえば文語の ky-の一部が中古ビルマ語の kl- から来源していることがわかって、具体的に多くの単語に関してどの単語とどの単語が kl- であったかというような決定は、やはりタボイ方言形式などに頼らねばならない。

のようになる。

現代ビルマ語の子音体系には、閉鎖音・破擦音・摩擦音に、無声無気音 k- p- t- c- s-: 無声出気音 kh- ph- th- ch- sh-: 有声無気音 g- b- d- j- z- の三つの対立が認められる。しかし、この中有声無気音を初頭にもつ単語は、大部分がパーリ語などからの借用語であり、そのほかの単語は、歴史的には、無声出気音または鼻音から来源している。それ故、中古ビルマ語には無声子音と有声子音の対立は、借用語を除いては、もともとなかったのである。たとえば galoun «galon» はパーリ語 garuda から、 gaathaa «verse» はパーリ語 gāthā から、それぞれ借用された単語であり、現代ビルマ語の kêe «guide» および khêe «lead» に対立する gêe «stone» は、中古ビルマ語では «lead» と同じ形式 khêe をもっていた。

同様に、現在 kâun- «to be good» に対立する gâun «head» は、中古ビルマ語では kh^woŋ² であった。また baa «what», bee «which» は、それぞれ、maa, mañ から来源していると考え得る。

しかし、ビルマ語が、本来これらとは別に有声子音の系列をもっていて、それが過去のある段階において、無声音に変化したことには、ほとんど疑いの余地がない。つまり12世紀初頭のビルマ語で無声子音であったと推定できる音素の中には、それより以前の段階では対立した関係にあった無声子音と有声子音が混在していたことは、多くの親族言語の形態から考えて絶対的に確かである。それ故、ビルマ語のかつての有声子音の系列を、どのような根拠から再構成できるかが、大きい問題となってくる。

一方、口語諸語では、Hani 語のほかは、無声子音と対立して、有声閉鎖・破擦・摩擦音ははっきりと存在する。たとえば、口語 Nyi 方言と、Lisu 語には、つぎの対立がある³⁾。

Nyi 方言 p- ph-: b-, t- th-: d, k- kh-: g-, x-: ɣ-, f-: v-, tɕ- tɕh-: dz-, ts- tsh-:
dz-, tʂ- tʂh-: dzɰ-, ɕ-: j-, ʂ-: zɰ-, s-: z-

Lisu 語 p- ph-: b-, t- th-: d-, k- kh-: g-, x-: ɣ-, f-: v-, tʃ- tʃh-: dʒ-, ts- tsh-:
dz-, ʃ-: ʒ-

もし、口語とビルマ語の音素体系の間に、明瞭な対応の規則性を全般的に発見できるならば、変化した古代ビルマ語の有声子音系列を再構成する根拠を、口語諸語に求めればよいことになる。そして、その手続には、少しも面倒はない。つまり、口語諸語の有声子音に対応する中古ビルマ語の無声子音は、すべてかつての有声子音から来源したと推測して、古代ビルマ語形式を推定すればよいことになるからである。たとえば、つぎの対応例から古代ビルマ語形 *p-

3) Nyi 方言形は馬学良：『撒尼彝語研究』語言学專刊，第二種，中国科学院編，商務印書館出版，1951. にもとづき，Lisu 語は Fraser: *Handbook of the Lisu (Yaw yin) Language*. Rangoon, 1922. を中心に『僛僛語語法綱要』中国科学院少数民族語言研究所編，科学出版社，1959. を参考にした。なお、そのほかの資料については、拙稿「西夏語の数詞について」『石浜先生古稀記念東洋学論叢』p. 112-を参照されたい。

ph- に対立する *b- を、あるいは *s- に対立する *z- を推定することには、何ら面倒はない。

	Nyi	Ahi	Hani	Lisu	Burmese	
1. «knee»	pʏ ₂₂	po ₂₁₋	phɔ ₂₁	—	pu-chac	*Cpu-
«to vomit»	phɪ ₂₂	phi ₄₄	phə ₂₁	hpē ⁶	phit-	*phit-
«frog»	pa ₅₅	po ₅₅	phɔ ₂₁	-pa ¹	phaa ²	*phaa ²
«to be clear»	ba ₃₃	bo ₂₂	pɔ ₁₃	ba ³	pa ³⁻	*baa ³
«insect»	by ₁₁	bu ₂₁	pi ₂₁	bi ⁵	poo ²	*buu ²
2. «three»	sɤ ₅₅	sɿ ₄₄	ʃu ₂₁	sa ³	sum ²	*sum ²
«blood»	sʒ ₅₅	sɿ ₄₄	sɿ ₃₃	si ⁵	swei ²	*suy
«tree»	sʒ ₅₅	si ₄₄	sə ₂₁	si ²⁻	sac	*sac
«child»	zɑ ₁₁	zɔ ₂₁	zɔ ₂₁	za ⁵	saa ²	*zaa
«urine»	ʒ ₁₁	ze ₂₁	-ʃu ₂₁	rzi ⁵	sei ²	*ziy ²
«leopard»	ʒ ₂₂	zɿ ₄₄	zi ₅₅	—	sac	*zac

しかし、このような推定が、果して当を得ているであろうか。ロロ諸語の有声子音の系列がたしかにビルマ・ロロ共通態の有声子音系列を忠実に反映しているといえるであろうか。換言すれば、ロロ諸語自体が独自の方法である条件の下に無声子音の一部に有声音化を起したり、有声子音の一部に無声音化を起したりしたことがなかったと保証することが可能であろうか。この疑問をまったく解決することはむづかしいけれども、私は、この問題を、これらの言語相互の間に発見できる声調の対応関係と関連して検討することができると思う。

3

一般に、チベット・ビルマ語系およびタイ語系の言語の比較研究にあたっては、子音音素・母音音素の対応のほか、声調の対応関係をも重要な証明の手順としなければならない⁴⁾。かりに、A言語とB言語が、子音音素・母音音素が規則的に対応する単語形式を、かなり豊富にもっていたにしても、その両言語の間に、規則的な声調の対応関係を定立することができなければ、私は、その両言語の親族関係の証明は、必ずしも成功しているとはいえないと思う。この系統の言語を比較するにあたって、親族関係の証明にもっとも決め手になるものは、むしろ声調の対応にあるといってもよい。

そして、声調体系は、単語の音素形式の変化と極めて密接に関連して個々の声調の型を変え、その結果、新しい声調類の対立を形成しながら変化していく。それ故、声調体系の様式の親密さの度合が、方言間あるいは言語間の親近さの度合を決定する場合も少なくない。その代表的な例は、タイ諸語である。

4) cf. 拙稿「Tonematica Historica トネームによるタイ諸語比較言語学的研究」『言語研究』25号、1954。

タイ諸語の場合は、声調はまず音節タイプによって限定され、そして一般に初頭音の性格との間に特定の分配関係が成立している。声調の数が多ければ多いほど、この分配関係にはすき間が多くなってくるのが原則である。現代ビルマ語のいずれの方言においても、同様に声調は、音節タイプによって限定されるけれども、初頭音の性格との間には、特定の相関関係を認めることができない。ロロ諸語では、さらに進んで音節タイプによる限定さえも成立しない。シャム語は、六種の声調をもつ現在の段階に変化する以前の状態、すなわち四種の声調の段階で文字表記に声調記号がつけられた。そのお蔭で四声から六声への変化を、現在なお保存される古い文字表記法から、はっきりとあとづけることができる。これに対して、ビルマ語の場合は、表記面に声調符号がつけられた時には、すでにビルマ語自体が、もともとの声調体系から離れて現在の四種の声調をもつ体系に変わっていた。そのみではなく、この両言語の声調体系の成立には、かなり違った条件がはたらいていたに違いないと思う⁵⁾。しかし、ビルマ語とロロ諸語の現在の声調体系を比較することによって、その起源的な声調類と声調型を推定することは、十分に可能である。

4

まず、ここで取り上げるロロ語ニ一方言、アヒ方言、ハニ語、リス語およびビルマ語の声調体系を掲げて、比較される対象を明らかにしておきたい⁶⁾。

ロロ語, ニ一方言	アヒ方言	ハニ方言	リス語 ⁷⁾	ビルマ語
1. 高平型 55	1. 高平型 55	1. 高平型 55	1. 高平型 55	1. 中平型 22
2. 半高型 44	2. 中平型 44	2. 中平型 33	2. 高昇型 [?] 35	2. 高平型 44 ²
3. 中平型 33	3. 低平型 22	3. 高降型 53	3. 中平型 33	3. 高降型 41
4. 低平型 11	4. 中短型 44	4. 低降型 21	4. 半中平型 ²²	4. 高短型 44
5. 短平型 [?] 22	5. 低降型 21	5. 低昇型 13	5. 低平型 11	
			6. 低短型 [?] 11	
五 声	五 声	五 声	六 声	四 声

5) 私は、少なくともシナ・チベット語族における声調体系の起源は、特定の音素の消失にあると考える。この状況をもっともよく示すのが、チベット語である。cf. 拙稿「チベット語とビルマ語におけるトネームの対応について」『言語研究』34号、1958。

6) アヒ方言は、袁家驊：『阿細民歌及其語言』語言学専刊、第五種、北京、1953。にもとづき、ハニ語は、高華年：「揚武哈尼語初探」『中山大學學報』(社会科学)、1955。による。

以下の声調表記は、ニー・アヒ・ハニ語は声調型を用い、リス語とビルマ語は声調類で示した。声調類は、対立する声調の種類を単に序数で代表させたものであるが、声調型は、1から5までの段階を設けて、その高低 (register) および昇降 (contour) 関係を具体的に示す方法を用いて表記した。たとえば、35は3位の段階から5位まで上昇する型をあらわし、33は中位の平板型を示すなど。

7) リス語の声調型は Fraser 上掲書の説明から与えたものである。なお Fraser の記述については、芮逸夫：「記栗粟語音兼論所謂栗粟文」『集刊』十七本 p. 313 以下に説明がある。つぎにリス語の標準語怒江方言 (上掲『栗粟語語法綱要』による) と Fraser の Têng yüeh 騰越方言の間に見られる声調型の相違を記しておきたい。

	«seed»	«bird»	«gold»	«to be warm»	«kind»	«to be new»
怒江方言	[u ¹ 55	nié ² 35	[u ³ 44	ly ⁴ 33	[u ⁵ 31	[u ⁶ 42
騰越方言	shī ¹	nyá ²	shī ³	lē ⁴	shī ⁵	shī ⁶

つぎに、これらの諸言語の間で、対応例がかなり豊富であって、もっとも基本的であると想定できる対応原則を中心に、言語間に発見し得る対応原則を掲げる。

対応原則 A i

	Nyi 11	:	Ahi 21	:	Hani 21	:	Lisu 5 (11)	:	Bur. 2
«flesh»	xɑ 11		xo 21		sɔ 21		hwa ⁵		a-saa ²
«pine»	tho 11-		thu 21-		thu 21-		htaw ⁵ -		thaŋ ² -
«to be bitter»	qha 11		kha 21		xɔ 21		hkwa ⁵		khaa ² -
«salt»	tsha 11		tsho 21-		tsha 21-		htsa ⁵ -		chaa ² -
«to eat»	dza 11		dzo 21		tsɔ 21		dza ⁵		caa ² -
«to sell»	ɥ 11		vu 21		o 21		wu ⁵		rɔŋ ² -
«bone»	ɣu 11		ɣɤ 21		-i 21		waw ⁵ -		roo ² < ruuu ²
«urine»	ʒ 11		ze 21		-ʃu 21		rzi ⁵		sei ² < siy ²
«child»	zɑ 11		zo 21		zɔ 21		za ⁵		saa ²
«sky»	ɱ 11		ɱ 21		-mo 21		mu ⁵ -		moo ² < muuu ²

対応原則 A ii

	Nyi 11	:	Ahi 21	:	Hani 13	:	Lisu 5 (11)	:	Bur. 2
«to hear»	-ga 11		-dʒo 21		kɔ 13		pa ³ -ja ⁵		kraa ² -
«to steal»	khui 11		khɤ 21		xə 13		hku ⁵		khoo ² - < khuuu ² -
«to be large»	jæ 11		ɣa 21		xə 13		wu ⁵		krii ² -

A i および A ii の対応原則を、ハニ語の対応形が低降型 21 であるか低昇型 13 であるかによって分けた。この両者の分裂の条件は、実際には明らかではないが、強いて初頭子音の性格におくならば、A i の原則は初頭に単純子音をもった単語に、A ii の原則は初頭に子音結合をもった単語にあらわれたと推定できる。

«聞 く» *graa > *rgaa > *rkaa > kɔ 13

«大きい» *gray > *rgay > *rkhæ > xə 13

«盗 む» *rkhuuu > xə 13 に対して、

«にがい» *khaa > xɔ 21 «肉» *saa > sɔ 21

[«にがい» «肉» のより古い形式が *Ckhaa, *Csaa であっても差支えがない]

推定できる一連の変化過程の中、初頭に *rkh-: *kh- の対立があった段階が、ハニ語の声調体系に反映していると推定できるであろう。

対応原則 A iii

	Nyi 55	:	Ahi 21	:	Hani 21	:	Lisu 5(11), 1(55):	Bur. 2
«five»	ŋɑ 55		ŋo 21		ŋɔ 21		ngwa ⁵	ŋaa ²

«many»	na 55	no 21	—	myá ⁵	myaa ²
«fish»	ŋa 55	ŋo 21	ŋo 21	ngwa ¹	ŋaa ²
«blood»	sʒ 55	sɿ 21	ʃɿ 21	si ⁵	swei ² < suy ²

この対応原則は、上掲 A i に対して、ニ一方言形が異なるのみである。この分裂は、つぎのように説明できる。原則 A i と A ii に属する対応例の中には、鼻音 ŋ- n- にはじまる形式が含まれていない。したがって、ニ一方言では初頭に ŋ- n- をもつ単語は高平型 55 をとり、そのほかは低平型 11 になったと推定できる。

しかし、初頭音 s- は、A i にも、A iii にもあらわれる。この事実は、対応原則 A iii に属する単語「血」がもともと *ŋsuy の形をもっていたためであると推定したい。

対応原則 B i

	Nyi 55	: Ahi 55	: Hani 21	: Lisu 1 (55)	: Bur. 2
«frog»	pa 55	po 55	-pho 21	wu ¹ -pa ¹	phaa ²
«dew»	tsʒ 55	tçi 55	tʃho 21	—	chii ²
«to be poor»	ʃa 55	ʃo 55	so 21	sha ¹	hraa ² - «to be scarce»
«pine tree»	ʃu 55-	ʃu 55-	ʃu 21-	—	-ruu ² < hruu ² -

対応原則 B ii

	Nyi 55	: Ahi 44	: Hani 21	: Lisu 1, 3(33)	: Bur. 2
«nine»	ku 55	kɤ 44	kə 21	ku ¹	koo ² < kuuu ²
«ear»	na 55-	no 44-	no 21-	na ¹ -paw ³	naa ²
«three»	sɤ 55	sɿ 44	ʃu 21	sa ³	sum ²
«grandchild»	ɿz 55	li 44	li 21-	li ³ -pa ³	mrei ² < mliy ²
«four»	ɿz 55	li 44	li 21	li ³	lei ² < liy ²

B i と B ii は、アヒ方言の対応形が高平型 55 であるか、中平型 44 であるかによって分けた。この二類は、リス語における高平型 1 と中平型 3 の分裂と単語ごとに一致しないが、ここに掲げた例による限り、前者に属する単語の初頭音は ph-, ch-, hr-, 後者の初頭音は k-, n-, s-, l- であるから、出気音対無気音の差異がこの分裂を条件づけたと推定することができる。後者に属する単語の初頭音は、おそらく無声無気音から来源したのであろう。

«九» *k-, «耳» *ŋ-, «三» *s-, «孫» *ɿ-, «四» *ɿ-

対応原則 A および B をまとめるとつぎのようになる。

	B		A	
	voiceless		voiced nasal	voiced-voiceless
	unaspirated	aspirated		
Nyi	55 (B i ii : A iii)		11 (A i ii)	
Ahi	44 (B ii)	55 (B i)	21 (A i. ii. iii)	
Hani	21 (A i ii : B i ii iii)			13 (A ii)
Lisu	3 (B i ii)	1 (B i : A iii)	5 (A i ii iii)	
Bur.	2			

原則 A・B が代表する対応関係の起源的な形は、ビルマ語では一つの声調によって代表され、ニ一方言およびハニ語では二つの声調に、アヒ方言とリス語では三つの声調に、それぞれ分裂した。しかし、分裂の方式は必ずしも言語間で並行しておらず、原則 A と B の対応関係が実際には一部で組み合わさっているために、A と B をそのまま厳密に分離して考えることはできない。この事実を、私はつぎのように解釈する。

各言語における声調体系の成立は、各言語の特定の発展段階における単語の音形式を忠実に反映する。対応原則 A・B 二類の大きい相違をもたらしたのは、つぎの点にあった。前者は有声音を単純初頭音とするか、または一つの有声音の先行する初頭音（無声・有聲）をもった単語であった。これに対して、後者の単語は、無声音を初頭にもつタイプに限られた。

A 類の単語は Cvv, Cvc または Ccvv, Ccvc [C=voiced] の様式をもち⁸⁾、

B 類の単語は Cvv, Cvc [C=voiceless] の様式をもった。

上に掲げた単語の共通形式をつぎのごとく推定する。

^A «flesh» *C_saa, «pine» *C_thaŋ, «to be bitter» *C_khaa, «salt» *C_tshaa, «to eat» *d_zaa, «to sell» *C_r^woŋ, «bone» *C_ruuu, «urine» *C_ziy, «child» *C_saa, «sky» *m_uuu, «to hear» *C_graa, «to steal» *C_khuuu, «to be large» *C_gray

^B «five» *C_ŋaa, «many» *m_yaa, «fish» *C_ŋaa, «blood» *ŋ_suy, «frog» *p_haa, «dew» *t_{sh}ii, «to be poor» *x_raa, «pine» *-x_ruu, «nine» *k_uuu, «ear» *ŋ_aaa, «three» *s_um, «grandchild» *ŋ_iy, «four» *ŋ_iy.

「肉」、⁸⁾「にがい」、⁸⁾「塩」など有声音の声調（低平型）をとるのは、初頭音に先行した有聲音に起因したものとする。この先行する有聲音はすべての口語ビルマ語を通じて、次第

8) この C- は必ずしも単純子音であることを意味しない。一種の音節的な範疇詞であっても差支えない。ただ核音節初頭の無声音にある変声の条件を与える要素であることを示している。

に脱落したが、その過程が均一ではなかったために、各単語の声調類の帰属関係に異同が起こったのである。たとえば、さきに掲げた《にがい》と《盗む》は共通態では共に Cc_vv 形式であったが、ハニ語では、つぎのように変化した。

	a	b	c	
《にがい》	Ckhaa	→ khaa	→ xɔ ²¹	(A i)
《盗む》	Ckhuuu	→ rkhuuu	→ xə ¹³	(A ii)

ハニ語の声調体系が成立したのは、b の段階であると考えられるから、ハニ語で低降型21をとる単語には、cvv, cvc 様式を、低昇型13をとる単語には、Cc_vv, Cc_vc 様式を、声調が成立した時代のハニ語の音形式として推定できる。これに対して、ビルマ語の声調体系が成立したのは a の段階から直接 c の段階に移行する時にあったと考えられる。

リス語にのみ認められる《五》ngwa⁵ 低平型と《魚》ngwa¹ 高平型の対立もつぎのように解釈できる。

	a	b i	c	b ii	b iii
《五》	Cɲaa	→ ɲwaa	→ ɲ ^w aa ¹¹	ɲaa	ɲaa
《魚》	Cɲaa	→ ɲ ^w aa	→ ɲ ^w aa ⁵⁵	ɲaa	ɲaa

リス語の声調は b i の段階を反映し、ニー方言は b ii の段階を、そのほかの言語の声調はすべて、a または b iii の段階を反映した。

《火》、《果物》の不規則対応もつぎのように解釈できる。

	Nyi	Ahi	Hani	Lisu	Bur.
《fire》	ɲ ¹¹	ɲ ⁴⁴	mi ²¹	—	mii ²
《fruit》	sʒ ¹¹	ʃl ⁴⁴	ɕi ²¹	-si ⁵	a-sii ²
	a	b	c		
《火》	Cmii	→ mii	→ mii		
《果物》	Csii	→ sii	→ sii		

ニー方言では、a の形式を、アヒ・リス語では b の形式を、そして、ビルマ・ハニ語では a または c の形式を、この単語の声調は反映している。

この対応原則 A・B が代表する共通語の声調類を、第 I 類とよびたい。

対応原則 C i

	Nyi ³³	:	Ahi ²²	:	Hani ⁵⁵	:	Lisu ⁴ (22)	:	Bur. 1
《I》	ɲa ³³		ɲo ²²		ɲo ⁵⁵		ngwa ⁴		ɲaa
《to be ill》	na ³³		no ²²⁻		no ⁵⁵		na ⁴		naa-
《iron》	xu ³³		xɛ ²²		ɬu ⁵⁵		haw ⁴		sam
《oil》	tshz ³³		tsha ²²		tʃh ⁵⁵		hwa ⁵ -htsi ⁴		chii

«to die»	sʒ 33	ʃ 22	ʃ 55	shī ⁴	sei < siy-
«wine»	tsʒ 33	tʃi 22	tʃi 55	—	sei < siy

対応原則 C ii

	Nyi 33	: Ahi 22	: Hani 55	: Lisu 3 (33)	: Bur. 1
«body»	ku 33-	kɤ 22	kə 55-	gaw ³ -	koy < kuuu
«water»	ʒ 33	ji 22	i 55	yi ³ -jya ³	rei < riy

対応原則 C iii

	Nyi 33	: Ahi 22	: Hani 33	: Lisu 4 (22)	: Bur. 1
«man»	tsho 33	tshu 22	tʃho 33	htsaw ⁴	suu
«to be white»	ʒz 33	tho 22	phu 33	hpu ⁴	phruu
«intestine»	y 33	o 22	zu 33-	wu ⁴	'uu

原則 C i と C ii は、リス語の対応形（中平型か半中平型）にもとづいて分け、C i と C iii は、ハニ語の対応形が高平型であるか中平型であるかによって分けた。しかし、この三つのグループ C i, C ii, C iii の分裂と初頭音の関係は、あまり明瞭ではない。リス語で中平型 3 (33) をとる例は少なく、その初頭音は、有声閉鎖音 g- j- < *dr- に限られるために、C i と C ii は補い合う関係にあると想定できるけれども、ハニ語の tʃh- は C i にも C ii にも属するから、この分裂には、別の条件を考えねばならない。これについては、後で検討したい。

対応原則 D i

	Nyi 44	: Ahi 44	: Hani 33	: Lisu 3, 4	: Bur. 1
«to look»	ne 44	ni 44	mo 33	nyi ³	mraŋ-
«thousand»	-ty 44	to 44	-to 33	-tu ³	-thoŋ
«to cry»	ŋ 44	ŋɤ 44	ni 33	ngu ⁴	ŋoo < ŋuuu

対応原則 D ii

	Nyi 44	: Ahi 44	: Hani 55	: Lisu 3	: Bur. 1
«to seek»	ʃa 44	ʃo 44	sɔ 55	hwa ³	hraa-
«to be red»	ŋ 55	ni 44	-ni 55	ni ³	nii-

原則 D i と D ii は、ハニ語の対応形が中平型33であるか、高平型55であるかによって分けた。したがって、つぎの例は、D i, D ii いずれに属するかは明らかではない。

	Nyi	Ahi	Hani	Lisu	Bur.
«name»	mæ 44	mɛ 44	—	mye ³	a-maŋ
«to be long»	çæ 44	xɛ 44	—	shī ³	hraŋ

さて、上に掲げた対応原則 C および D をまとめるとつぎのごとくなる。この原則 C・D は、ビルマ語で一類にまとまるほかは、すべてははっきりと、二類に分かれる。しかし、C・D

	C	D
	voiceless-voiced	voicless-voiced
Nyi	33 (C i ii iii)	44 (D i ii)
Ahi	22 (C i ii iii)	44 (D i ii)
Hani	55 (C i ii)	33 (C iii D i ii)
Lisu	4 (C i ii)	3 (C iii D i ii)
Bur.	1 (C i ii iii D i ii)	

共にそれぞれに無声子音と有声子音を含むために、上掲原則A・Bと同様に、ここでもC・D二類の分裂の根拠を初頭音に先行する子音の有無に求めたい。すなわち、原則Cの対応関係をもつ単語は、cvv または cvc [c=voiced, voiceless] の音節様式をもったのに対して、原則Dに属する単語は Ccvv または Ccvc [C=voiced] の様式であった。上に掲げた単語の共通形式は、つぎのごとく推定できる。

^C «I» *ɲaa, «to be ill» *naa, «iron» *sam, «oil» *tshii, «to die» *siy-, «wine» *siy, «body» *kuuu, «water» *riy, «man» *tshuu, «to be white» *phruu, «intestine» *vuu.

^D «to look» *Cmraŋ-, «thousand» *Cth^woŋ, «to cry» *Cɲuuu, «to seek» *ɣraa, «to be red» *Cnii, «name» *Cmañ, «to be long» *ɣrañ.

個々の単語について、言語間に見られる対応関係の若干の異同は、この声調体系が成立した当時における当該言語の音節様式の相違を反映しているものと理解できる。さきに保留したリス語の「身体」「水」が中平型3(33)をとるのは、原則Dに属するから、上に推定した共通形式「身体」*kuuu「水」*riyに対して、リス語は、先行子音をもつ形式「身体」Cguuu→gɔ,「水」Criy→jy-a [C=d?]を反映していたと考えて差支えがない。これはリス語において起こった有声音化の現象であると推定できるであろう。また、C iii にハニ語中平型33があらわれるのは、この声調が原則Dの対応形であるから、ハニ語の「人」は tshuuu に対して Ctshuuu > tsho, «白い」は phruu に対して rphuu (?), «腸」は vuu に対して zvuu の形式をもっていたと考え得る。さらに D ii のハニ語 sɔ⁵⁵ «探す」および -ni⁵⁵ «赤い」は、原則Cの声調をとっているから、*Csɔ, *Cni ではなく、sɔ, ni であったろう。つぎの例、

	Nyi	Ahi	Hani	Lisu	Bur.
«nose»	nɔ 44	no 22-	nə 44	na ³ -bē ⁴	hnaa

は、ニ一方言とハニ語が原則Cに、アヒ方言とリス語が原則Dに属することを示すから、この声調が来源した形式として、Nyi *na, Ahi *Cna, Hani *nə, Lisu *Cna, Bur. hnaa を推定できる。

この対応原則C・Dが代表する声調類を、第II類とよびたい。

対応原則 E i

	Nyi 22	:	Ahi 44	:	Hani 21	:	Lisu 6 (?11)	:	Bur. -k -t -c
«six»	khu [?] 22		tʃhu [?] 44		khu 21		hchaw ⁶		khrok
«pig»	ve [?] 22		vie [?] 44		pa 21		-vá ⁶		wak
«goat»	tɕhi [?] 22		tɕhi [?] 44		tshi 21		-hchī ⁶		chit
«to be new»	qi [?] 22		qi [?] 44		-sə 21		shī ⁶		sac
«hand»	le [?] 22		lie [?] 44		la 21		la ⁶		lak
«eight»	he [?] 22		xi [?] 44		xæ 21		h'i ⁶		hrac

対応原則 E ii

	Nyi 22	:	Ahi 44	:	Hani 33	:	Lisu 6	:	Bur. -t -p
«to be hungry»	ŋ 22		ni 44		mie 33		-mrghe ⁶		mwat-
«to sleep»	ji [?] 22		ji [?] 44		i 33-		yi ⁶ -		?ip-

対応原則 E i および E ii は、ハニ語の対応形によって分かれるが、後者の例は少ない。このほかりス語で 6 (?11) ではなく 5 (11) があたる例がある。

«leaf»	phe [?] 22-		phie [?] 44		-pha 21		-hpyá ⁵		phak
--------	----------------------	--	----------------------	--	---------	--	--------------------	--	------

また、つぎの2例は、ハニ語の対応形がわからないために、原則 E i, E ii いずれに属するかを決定することができない。

«to wear»	vi [?] 22		vi 44		—		rgh ⁶		wat-
«to weave»	ji 22		ji 44		—		hchī ⁵		rak-

対応原則 F i

	Nyi 44	:	Ahi 44	:	Hani 55	:	Lisu 2, 3, 5	:	Bur. -k -p
«bird»	ŋe 44		xie 44		ŋa 55		nyá ²		hŋak
«to be black»	ne 44		nie 44		na 55		ná ³		nak
«eye»	ne 44-		nie 44-		ma 55-		myá ³ -		myak
«chain»	dzu 44-		dzu 44-		-tsu 55		—		-krop < -krup
«upper part»	the 44		thie 44		tha 55		hta ⁵		a-thak

対応原則 F ii

	Nyi 44	:	Ahi 44	:	Hani 33	:	Lisu 1, 2	:	Bur. -k -c
«to be sharp»	the 44		thie 44		tha 33		—		thak -

«heart»	n̩ 44-	ni 44	nu 33-	ni ² -ma ³	hnac
«hen»	je 44	je 44	xa 33	-rgħa ¹	krak

原則 Fi ii の二類は、ハニ語の対応形にもとづいて分けた。リス語は、これに 1, 2, 3, 5 の四種が対応して不規則である。

対応原則 E・F をまとめるとつぎの表になる。対応するビルマ語形から見れば、この原則 E と F は、いわゆる入声であって、このグループに属する単語はもともと末尾に閉鎖音をもって来たことは明らかである。原初の形態では、おそらく一種の声調のみがあったにちがいない。それがニー・アヒ両方言では 2 類に、ハニ語では 3 類に、リス語では 5 類に、現代ビルマ語では、母音のタイプの違いによって 2 類に分かれた(単純母音は高短型, 2 重母音は高降型)。ビルマ語では末尾の閉鎖音は保存されたが、ロロ諸語では、原則 E に属する単語がニー・アヒ両方言で閉鎖音を保たれるほかは、ある段階で全般的に末尾音は消失した。その結果、本来入声の一部は、上記原則 D と一致した対応関係をもつようになった。この事実、原則の分裂の条件を示唆しているように思われる。さきに、私は原則 C が cvv, cvc 音節様式から生れたのに対して、原則 D は、Ccvv, Ccvc 様式から由来したと推定した。それから類推して、この原則 E・F の分裂にも、同種の対立を予想することが許されるであろう。

	E		F	
	voiced-voiceless		voiced-voiceless	
Nyi	22 (E i ii)		44 (F i ii)	
Ahi	44 (E i ii)		44 (F i ii)	
Hani	21 (E i)	33 (E ii F ii)	55 (F i)	
Lisu	6 5 (E i)	1 2 3 5		
Bur.	-p -t -k -c (E i ii F i ii)			

原則 E に属する単語は cvc 様式であって、ニー・アヒ両方言で末尾の閉鎖音⁹⁾を保存する。**m^wot > ni[?] 22*

原則 F に属する単語は、Ccvc 様式であって、一般に末尾の閉鎖音⁹⁾を消失する。**Cmyak → nie 44*

上に掲げた単語の共通形式をつぎのごとく推定できる。

^E «six» *khrək, «pig» *vak, «goat» *chit, «to be new» *sa₂k⁻⁹⁾, «hand» *lak, «eight»

9) ビルマ文語の -c は、もともとは特定の母音と連続する -k であって、-ac は *æk < æg, æt < æd から来源したと考える。ここでは、それを -a₂k で代表させた。cf. 拙稿「ビルマ語音韻体系の構造的分析」『東方学』第七輯, p. 108-.

*xra₂k, «to be hungry» *mɔt-, «to sleep» *yip-, «leaf» *phak, «to wear» *vat-, «to weave» *rak-.

F «bird» *Cɲak, «to be black» *Cnak, «eye» *Cmyak, «chain» *Ckruɹp, «upper part» *Cthak, «to be sharp» *Cthak, «heart» *Cna₂k, «hen» *Ckrak.

ハニ語では, cvc 様式の単語は²²の型をとったが, Ccvc 様式は, 高平型 55と中平型33の両型に分かれた。しかし, その条件は明らかではない。cf. «鋭い» 対 «上部»

また原則 E と F が混合するつぎの例

	Nyi	Ahi	Hani	Lisu	Bur.
«tree»	sʒ 44	si 44	sə 21-	si ² -	sac
«stone»	lu 44-	lu 44-	ʃu 21-	—	kyok < klo _k

は, ニー・アヒ両方言とハニ語の形式が «樹» *sa₂k «石» *lɔk であったのに対して, リス語は *Csa₂k, *Clo_k の形式をもっていたことを示していると思う。

対応原則 G

	Nyi 55	:	Ahi 55	:	Hani 21	:	Lisu 6, 3	:	Bur. -k -t -c
«monkey»	nu 55		nu 55		-nu 21		chya ² -mye ⁶		myok
«joint»	tsʒ 55		-tsi 55		-tshə 21		—		a-cac
«branch»	qe 55		tqe 55		—		-ka ³		a-khak
«to suck»	tʒʒ 55		tʃʃ 55		—		hchi ⁶		cut

対応原則 H

	Nyi 11	:	Ahi 21	:	Hani 33, 21	:	Lisu 5	:	Bur. -t -c
«to kill»	xɔ 11		xo 21		ɕe 33		se ⁶		sat-
«two»	ɲ 11		ni 21		ni 21		nyi ⁵		hnac

原則 G・Hは, リス語のほかは, 原則 B および A と対応関係が一致する。しかし, これらの単語がもともとは -k -t -c に終わっていて, その声調はいわゆる入声であったことは, ビルマ語の形式とリス語の声調から確かである。この事実は北京語で入声の一部(無声初頭音)が, 陰平・陽平・上・去声に分属した現象と極めて類似している。北京語の場合と同様に, ロロ諸語においても, その分属の要因は詳かではないが, 以上に採用して来た方法によって解釈するならば, つぎのように考えることができる。

	a	b	c
原則 E	m ^w ot	→ net	→ ni ⁴⁴
F	Cmyak	→ Cnyet	→ nie ⁴⁴
G	Cmyok	→ Cnyɔ	→ nu ⁵⁵
H	ɲa ₂ k	→ ɲe	→ ni ²¹

ロロ諸語（リス語のほか）の声調はbの段階で成立したが、原則E・Fに属する単語は、なお -t -k を保存していたのに対して、G・Fの単語はそうではなかった。ここに分裂の原因を求めて差支えないであろう。そして、G・Hの形式は、声調類Iに移った。原則E・Fによって代表される声調類を第三類とよびたい。

上に掲げる原則G・Hに属する単語の共通形式をつぎのごとく推定する。

^G «monkey» *Cmyok, «joint» *Ctsa₂k, «branch» *Ckhak, «to suck» *Ccut.

^H «to kill» *sat, «two» *ña₂k.

5

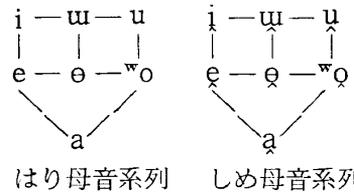
以上の結果、ビルマ語およびロロ諸語は、その共通段階で、母音または鼻音に終る音節には声調類IあるいはIIのいずれかを持ち、閉鎖音に終る音節には、声調類IIIをもったと推定した。さらにそれらの声調類が代表した声調型としては、I類には高平型、II類には低平型（または中平型）、III類には高短型をそれぞれ推定することができる¹⁰⁾。この比較研究の結果ビルマ文語の声調類は、かなり忠実に古代ビルマ語の声調体系を保存していることがわかり、古代ビルマ語の有声音系列の再現には、単に音素の対応関係のみではなく、声調の対応関係もとくに考慮して作業しなければならないことも、わかった。しかし、ここで、なお問題が残っている。それは、ビルマ語のいわゆる第三声調についてである。まずつぎにロロ諸語との間に発見できる対応例を掲げよう。

	Nyi	Ahi	Hani	Lisu	Bur.
I «to be high»	m̄ 44	mo 44	mu 33	nu ³	mraŋ ³ -
«flower»	vi 44	vi 44	βæ 33	-vé ³	a-phwaŋ ³
«to incline»	ŋæ 44-	ŋa 44-	—	—	hŋay ³ -
J «city»	-qo 44	lo 22	lo 55	-ma ³	mro ³
«moon»	ʔa 44	ʔo 22	-ʔo 55	h'a ⁴	la ³
K «seed»	ʂɿ 55	sɿ 55	ɿu 33	shi ²	a-cei ³ < a-ci ³
«father»	i 44 ba 11	a 44 ba 11	ɔ 21 pɔ 21	hpa ⁵ ~ba	a-pha ³ ~ba ³
«to get»	ɣa 33	o 44	ɿɔ 13	mrgh' ³	ra ³
L «year»	qhu 22	khu 44	ʔu 21	hkaw ⁶	khu ³ -

これらの対応例I «高い» «依る» «花» は上掲原則Dと、J «町» «月» は、原則Cの変形と、K «種» はBと、«父» はA («得る» はDの変形?) と、それぞれ一致する。この事実は、第三声調が声調類I、II、IIIに対立した性格をもつものではなかったことを意味していると思う。私は、ビルマ語の第三声調は、以上に推定した声調類I、II、IIIに対立する機能をもった単位ではなく、二つの対立した母音系列の一つが変形して生れたものであると考えたい。私

10) ここでは、声調類I対IIの対立をもたらした要因自体については考えていない。cf. 注5)

は、かつてのビルマ語にも、‘はり母音’の系列と‘しめ母音’（緊喉母音）の系列の対立があったと仮定する。中古ビルマ語の母音体系は、7種の母音音素（はり母音）の対立から成立したが、これと相応じる‘しめ母音’が上古ビルマ語にあった。後者の大部分は、中古ビルマ語で、‘はり母音’の系列と合一したと考えられるが、その一部が cvv 音節では短母音 a i u w ə を作り、cvc 音節では第三声調を生んだ。あるいはこれらの母音は、中古ビルマ語でもなお‘しめ母音’であった蓋然性は十分にある。私はこの証明に、つぎの事実をあげたい。ビルマ語の第三声調は、実は、Maru-Lashi 語の‘しめ母音’系列に対応するのである¹¹⁾。



	声調類 I (はり母音)	声調類 II (はり母音)	声調類 III (しめ母音)
Maru	«head» ao 44	«bowels» ao 41	«egg» aQ 11
Lashi	uu 44	uu 41	uQ 11
Bur.	uu ²	uu	u ³
Maru	«horse» myoŋ 44	«to look» myoŋ 41	«to be high» myQŋ 11
Lashi	myaŋ 44	myaŋ 41	myaQ 11
Bur.	mraŋ ² -	mraŋ	mraŋ ³ -

そのほかつぎの例がある。

	Maru	Lashi	Burmese
«to be ripe»	maŋ 41	myuŋ 41	hmañ ³ -
«to be low»	naŋ 11	naŋ 11	nim ³ -
«to turn round»	laŋ 11	luŋ 11	hlañ ³ -
«to move»	ɣuɣ 41	ɣuɣ 41	hrwei ³ < hrui ³
«front»	ɣeɣ 41	ɣeɣ 41	hrei ³ < hriy ³
«breast»	noŋ 41	nao 11	no ³ < mu ³

声調類 II, III に属する単語の中にも、もともと‘しめ母音’をもっていた形式が含まれていることも、Maru-Lashi 語からわかる。

«spear»	leŋ 41	laŋ 11	hlaŋ
«house»	yaŋ 11	yeŋ 11	?im
«water»	ri 41	gyeɣ 11	rei < riy
«to sleep»	yaŋ 41	yeŋ 41	?ip-

この事実のみからでも、Maru-Lashi 語が、ビルマ・ロロ諸語の歴史を考えるにあたって、

11) Maru 語および Lashi 語については、1960年に私が Myitkyina において調査した資料を用いる。

極めて重要な役割を果す言語であることが理解されるであろう。マル・ラシ語の記述的報告ならびにビルマ・ロロ語との全般的な比較研究は別の機会を得て発表したい。

6

ビルマ・ロロ諸語の共通形態は、他のチベット・ビルマ語系に属する言語の形から考えて、中古ビルマ語、あるいは現代ロロ諸語の形態よりもずっと複雑であったにちがいないと思う。しかし、その形態を再構成するためには、どのような根拠にもとづけば可能であるかは、未検討の問題であった。私は、その根拠の一つとして、ここで声調をとり上げた。声調の規則的な対応はもとより、不規則な対応関係からも、かえって音素形式の特徴を再構成できる有力な根拠をもつことになった。しかし、声調のほかにも、なおいくつかの根拠を発見できるであろう。それにはロロ系言語の資料をさらに多く集める必要がある。私が、ここで比較の対象とした言語は、雲南省およびビルマ北部の言語に限られている。それらの地域にもなお多種の方言・言語があるほか、タイ国北部にもロロ系言語が多く分布している。中国・ビルマ・タイの三地域におけるロロ系言語には、果してどのような際立った相違があるのか、またとくに特徴的な差異がないのか、さらに現在分布する地域の周辺言語からの影響がどのようなものであるかについては、現在の段階ではあまりはっきりとわかっていない。中国国内のロロ諸語の調査は十分に進められているけれども、ビルマ・タイ地域における調査は、なお残されている。ここに提出した私の仮説も、中国国内のロロ語のみではなくビルマ・タイ地域のロロ語に関する新しい資料を集め得て、さらに検討を加えねばならないであろう。

参 考 文 献

本文の注に掲げたもののほかに、つぎの関連論文がある。

1. Paul Vial : *Dictionnaire francais-lolo*. Hongkong, 1909.
2. A. Lietard : "Notions de grammaire lolo, dialecte A-hi" *BEFEO* 9. 1909.
3. id : "Notions sur les dialectes lolo" *BEFEO* 9. 1909.
4. id. : "Essai de dictionnaire lo-lo francais, dialecte A-hi" *TP* vol. 12. 1911.
5. Robert Shafer : "The Link between Burmese and Lolo" *Sino-Tibetica* No. 2. Berkeley, 1938.
6. 高華年 : 『彝語語法研究』北京, 1958.